

---

# 光より速いあなたへ（前編）

ヨネ@ハイテンション

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光より速いあなたへ（前編）

### 【コード】

N0963E

### 【作者名】

ヨネ@ハイテンション

### 【あらすじ】

夜空に輝く天の川。僕と彼女は天体観測をする。僕はこの日の為にある作戦を考えてきていた。小さな星は彼女の元で輝いてくれるだろうか………

(前書き)

短編でしたが少し長くなりそうなのでわけてみました。続きは後日にて！

遠く遠く離れている。  
すぐそばにいるあなたへ……………

望遠鏡のファインダーを覗くと、そこには無数の星の集合体が見える。

天の川。

まさしく天に流れる川だ。

「ほら、こっちきて望遠鏡覗いてみるよ」

ファインダーを覗く僕を尻目に、つまらなそうに足元の石ころを蹴飛ばしていた彼女に言葉をかける。

「別にいいよーだっ」

彼女は舌を出して拗ねて見せた後、罪も無い草を引っっこ抜き、それを僕に向けて投げつけた。

「いつまで怒ってるんだよ。ほら、ホントに綺麗だから見てごらんよ」

「怒ってなんかいないもん」

頬っぺたを子供のように膨らませる様があまりにも可愛らしかったので、僕はついつい噴き出してしまっ。

「なによ、なによ。何が面白いのよ。私はちっとも面白くなんか無いんだからねっ」

彼女は笑う僕の姿にお冠のご様子だ。

「まあまあ、だまされたと思ってこっちにきて覗いてごらんよ。ほんとにほんとにほんとにおくに綺麗なんだから」

僕のしつこさが彼女の意地に勝利したらしく、彼女はこちらに歩み寄って洪々と望遠鏡のファインダーをのぞきこんだ。

「わあ……………」

彼女は感嘆の声を一つもらした後、黙り込んでしまう。そして物言わぬまま、星々の世界へ心を羽ばたかせた。

「ほら、ほんとに綺麗だろ？」

「うるさいっ。静かにしててよ！」

僕の言葉は空に瞬く星々にはまるでかなわないようだ。

まあそれでもいいや、彼女の機嫌が直ったんだから。

「人気の無い山に登って天体観測をしようよ」

僕が彼女にそう伝えた時、彼女は露骨に嫌な顔をした。

「山の中なんて、蚊とか蛇とか居そうじゃない！ そんなところ行きたくなんて無いわよっ」

彼女は虫が嫌いだ、蛇は更に嫌いだ。

その2種類がそろって現れでもしたら、確実にパニックに陥るだろう。

ギヤーギヤーと泣き喚く彼女の姿が安易に想像できる。

しかし、無理を押し通してでも僕は天体観測に行きたいのだ。

それは一つの目的があるからだ。

それはとても大事な目的があるからだ。

嫌がる彼女のご機嫌をとるため、夜になるまでは彼女の好きなものを食べに行ったり、洋服を見に行ったりした。

その時に僕の財布からは諭吉様が数人家出をしたりしたわけだが、まあこれくらいの出費は仕方ないと割り切ってかかった。

目的地に着くと、僕は車のトランクから天体望遠鏡を取り出し担ぎ込んだ。

「あら、大変そうねえ」

彼女はそう言ってくれたが手伝う気はさらさらなようだった。

そして今に至る。

「どうですかお姫様、満足しましたか？」

10分ほど時間をおいてから僕は彼女に尋ねた。

「うむ、姫は満足じゃ」

やっとファインダーから目を離し、僕のほうを見てくれた。

「すごいね！ 星凄いね！ とおっても凄いよ！」

まるで小さい子みたいに凄いつて言葉を連発しながら、彼女は興奮のさめやらぬまま僕にどれだけ星空が綺麗だったかを伝えようとする。

その姿を見た僕は、小さい頃の彼女の姿を思い出す。

僕は昔からこうしていた。

二人で居るのが当たり前のようにだった。

幼馴染。

初めてあったのは幾つときだろう。

多分物心つく前だったのかもしれない。

物心ついたときにはもうすでに友達だった。

家族以外で同じ時間を最も過ごした存在。

それが彼女だ。

いつの日か僕は相手が異性であるという事に気がつく。

相手を意識して、自分の感情とは違う言葉を吐いたりもした。

もちろんケンカなんて何時ものことだ。

けれど、離れ離れのパズルのピースもいつか元の形に戻るように、

僕らは自然と形にはまっていった。

僕らは男と女として付き合う事にしたんだ。

気がつけば僕は26歳。

もちろん彼女も26歳。

開くことの無い年齢差。

立派とは言いがたいかもしれないけれど、社会人として生きていく。

「もっとお星様見てもいい？」

彼女は僕の返事なんて待つこともなく、ファインダー覗き込む。僕はその隙にポケットからとあるものを取り出す。

よし、大丈夫、大丈夫。きつと大丈夫。

「ああ、流れ星だあー！すごいなあー！きれいだなあー！」

僕は空を指さして、芝居かかったわざとらしい口調で叫んだ。

「えっえっ。どこ？ ねえどこよ？」

彼女は必死にレンズを右に左にと向けて探そうとするが見つけることが出来ない。

「望遠鏡じゃ見えないよ。ほらこっちこっち！」

僕の声に導かれるように、彼女はファインダーから目を離す。

そして、僕が導くその視線の先には小さな星がある。

とても小さくけなげに輝く星。

僕の手の中にある小さなお星様。

「ねえ、これって……」

彼女は恐る恐るその星に手を伸ばす。

「うん。結婚しよう」

僕はその小さな小さな星を手にとると彼女の指に……

「私の手にお星様が光ってるみたいだね……」

指の先に光るお星様、小さなダイヤの指輪をいとおしそうな目で彼女は見つめている。

「でも、ちよつとカッコつけすぎるんじゃない？」

彼女は僕の顔を覗き込んで意地悪そうに笑った。

僕は顔を真っ赤にして、頭から湯気なんか出しながら、鼻息なんか荒くしたりもして、それでも彼女に言葉を伝える。

「ば、ばかだなあ。こういうのはなんて言うか、あれだよ。こう、なんていうかだなあ、イベント的にでもしなきゃ、出来ないって言うか、あのその、とにかく……」

僕は目を閉じて大きく深呼吸をする。

3秒後に僕は口を開く。

「幸せにするよ」

「うん」

彼女は大きく頷いた。

僕も大きく頷いた。

僕らは今日この日よりあとは幸せなことしかないと思った。

他の事なんて一つも無いって思った。

それくらいに、馬鹿みたいに幸せな気持ちでいっぱいだった・・・

・・・

僕らは草原に腰を下ろして夜空を見上げた。

ここには時間の感覚が存在しないみたいだった。

携帯も腕時計も捨ててしまいたい気分だ。

「へへへっ、空のお星様も綺麗だけど、今の私にはこの指に光るちっちゃいお星様の方がもっつと綺麗だよ」

彼女は左手を前に突き出して、薬指を眺めてはうっとりとした表情を浮かべる。

「出来たらもつと大きいお星様がいいんだけどねえ」

「うるさいっ。これでも給料の三か月分なんだぞ」

「うそうそ。冗談ですよー。私ね、生まれてきて一番嬉しいのが今かもしれないよっ」

「俺が一番恥ずかしいのが今かもしれないぞ」

「ええー。嬉しくないの?」

「教えない」

「そんな事言う人とは結婚してあげません!」

彼女はそう言うつとツンとアゴを尖らしそっぽを向いた。

「ちよ、ちよっと待ってっば」

「しい〜らないっ」

「はい！ ワタクシ生まれてきてこれほど嬉しかった日は他にありません！ あるわけ無いです。ああ、今日は人生最高の日だー！」  
僕は身振り手振りのオーバーアクションを交えながら、天に届くほどの大声で叫んだ。

「よろしい、よく出来ました」

彼女はそう言つと、まるで子供でも扱つように僕の頭を優しく撫でてくれた。

これじゃ結婚してからもきつと尻に敷かれつ放しだなあ……

でもまあ、頭をなでられるとなんだかとっても穏やかな気持ちになる。

自然と笑顔になつてしまふ。

「ほんと、かなわないなあ……」

僕は彼女に聴こえないくらいの小さい声でつぶやいてみた。

「ん、なあに？」

「うん。なんでもない。それよりこの夜空、星が空から降つてきそつだよなあ」

僕は話を摩り替えるように、夜空を見上げた。

「知ってる？ この星の光つて何年も前に光つた光なんだぜ？」

「何年もまえ？」

「うん。光の速度つてあるだろ。あの星が光の速度で10年のところにあつたとすれば、俺たちが見ているあの星の光は10年前の光なんだよ」

「へえ、詳しいじゃん」

「伊達に天体望遠鏡を持つてませんから」

「ふふん。プロポーズのだしに使つただけのくせにい」

得意げに話す僕をこき下ろすように、彼女は突つかかつて見せる。

「うっさい。ホントに星は好きなんだよ」

そう言い返してみるも、プロポーズのときの事を思い出してしま

い真っ赤な顔の僕が居た。

「10年前の光りかぁ……………。10年後も20年後も、ずっと私たちは隣に居るよね」

「ああ、今までだつてずっと隣に居ただろ。これからも変わらないさ」

「なら私たちは光の速さで10年のところに居る人たちから見られても問題ないね」

「なんでだ？」

「だって、10年先20年先だつて、今と同じように傍に寄り添っているから。20年分離れた距離から見られても同じだよ」

「そっか……………。そうだよな！」

「そうだよつ。私たちは光の速さに勝っちゃってるんだよ！」

「うん。なんか意味はおかしいけど、そうだよな！」

僕は笑った。

夜の闇にかき消されないくらい大きな声で笑った。

理屈なんかじゃない。

そう、理屈も科学も関係ない。

アインシュタインだろうが、ラプラスだろうが、ピタゴラスだろうが。

どんな世界の天才にも、僕らの気持ちは計算できやしない。

遠く、より遠くに膨張する宇宙なんかには負けないスピードで、僕らは引かれ合つ。

そして、僕は隣り合つて笑うんだ。

僕らはいつまでもいつまでも星を見上げていた。

空に吸い込まれてしまうくらいに僕は星に見入っていた。

そんなロマンチックな時間も『ぐうぐう』という僕と彼女二人の腹の虫の襲来により、永遠に続くと思われた星々の祭りはあっけなく

終わりを遂げたのだった。

帰りの車の中で、僕と彼女はこれからの未来予想図について思いをはせる。

けれど、結局会話のメインは遠い未来のことよりも、30分後にたどり着くであろうラーメン屋の事に行き着いてしまうのだった。

「私、味噌ラーメンに決定！」

僕の車は夜の道を走る。

彼女の胃袋が求める味噌ラーメンのために。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0963e/>

---

光より速いあなたへ（前編）

2010年10月8日15時19分発行